

文芸復興期の菊池寛

——文学の大衆化をめぐつて

若松伸哉

一九三六（昭和一一）年十一月、雑誌『文芸通信』に太宰治は短い随筆「先生三人」を寄せている。このなかで太宰治は、「いま、私には、三人の誇るべき先生がごいます。井伏さんからは特に文章を、佐藤先生からは特に文人墨客の魂を、さうして菊池氏からは家を」と述べ、「先生」として井伏鱒二・佐藤春夫に加え、菊池寛の名前を挙げてゐる。そして「先生三人」の後半では、太宰治の入院に際して、「なくなつたら、また貰ひに來い。ばかな奴だ、と大いに叱つて、どつさり呉れた」と菊池寛からの経済的な援助のエピソードが記されている。

「先生三人」を掲載した『文芸通信』が文芸春秋社発行の雑誌である点を考えると、その経営者である菊池寛の名前が登場するのは、太宰治の媒体への意識も多少なりとも読み取れるが、しかしすでに文学上の師として太宰との交流がよく知られる井

伏鱒二および佐藤春夫と並んで、それほど交流について言及されない菊池寛の名前が登場するのは興味深い。太宰が菊池寛に關して実生活に對する援助を協調していることは、実業家として成功し、作家の相互扶助団体でもある日本文芸家協会などを立ち上げた菊池の特徴に沿っているが、この頃は太宰治に限らず文学界において菊池寛に關する言説が多く見られる時期でもある。本稿ではこの昭和一〇年前後の文学言説における菊池寛への言及を見ていく作業を通して、改めてこの時期に菊池寛が文学界において果たした役割を考えてみたい。

—

芥川龍之介や久米正雄らとともに『新思潮』出身の作家として登場した菊池寛は、一九二〇（大正九）年六月から一二月ま

で『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』に自身初となる現代通俗小説「真珠夫人」を連載し大ヒットすると、その後は生涯にわたって現代通俗小説を書いていくことになる。一九二三年一月、菊池は作家業のかたわら自ら編集する雑誌『文芸春秋』を創刊し、文芸春秋社を経営する実業家としても活動をはじめた。

『文芸春秋』創刊から一〇年後の一九三三（昭和八）年、すでに『文芸春秋』は多くの読者を持つ総合雑誌に成長し、菊池寛も大衆からの不動の人気を得た作家として、文壇において確固たる地位を持つに至っている。そしてこの一九三三年の二月には小林多喜二殺害というプロレタリア文学弾圧の象徴的な出来事があり、また一〇月には『文学界』『行動』が、一月には『文芸』などの文芸雑誌が相次いで創刊され、大正末から昭和初期にかけてプロレタリア文学や大衆文学に押され、その不振が問題となっていた純文学分野では、川端康成が「時あたかも文学復興の萌あり」（『文学界』一九三三・一〇）と記すようないわゆる〈文芸復興〉の期待が高まっていた。

この一九三三年から日中戦争がはじまる一九三七年あたりまでを現在でも文芸復興期と呼ぶことが多いが、とりわけそのなかほどである一九三五年には注目すべき出来事が起こっている。一九三六年版『文芸年鑑』（一九三六・三、第一書房）の「一九三五年の日本文学」を執筆した青野季吉は当年を振り返り、「純粹小説論、私小説論などの問題が、人々の関心をあつめ」、これを「文学といふものを、根本的に見直して、そこから新らし

く出発しようとの意欲にもとづいた」ものと見ている。こうした「内的」な太い一線の他方、「文学賞とか、文芸統制の問題とか、懇話会問題とかいふ、「外的」なうごきの太い一線があつた」と続ける青野は、「これらのものの示す意味は、この国の文学社会が、一般社会と新しい関係に這入らうとし、乃至は、新しい関係に置かれやうとする点にあると、私は觀察してある」と記している。

ここで青野は「この国の文学社会が、一般社会と新しい関係に這入らうと」する「外的」なうごき」として文学賞を挙げているが、この一九三五年に菊池寛によって創設された芥川龍之介賞と直木三十五章がその念頭の一つにあつたと思われる。『文芸春秋』一九三五年一月号に掲げられた「芥川・直木賞宣言」を見てみると、「文運隆盛の一助に資する」ために両賞を「無名若しくは新進作家」に贈ることが書かれている。

文芸復興期において新人作家を待望するモードがあつた点についてはすでに松本和也が指摘しているが、芥川賞・直木賞の設定もそうした文芸復興期の主要トピックに関わっており、文学界の動向も睨んだうえでの両賞の創設であつたことがうかがえる。第一回芥川賞・直木賞の発表は『文芸春秋』一九三五年九月号において行われるが、翌一〇月号の菊池寛「話の屑籠」（「話の屑籠」は『文芸春秋』に毎月連載）は、芥川・直木賞について「雑誌の宣伝」という広告的側面も正直に伝えつつ、すでに亡くなった芥川龍之介と直木三十五の顕彰に加えて、「新

進作家の擡頭を助け」る目的がある意図をここでも述べている。

当初の芥川・直木賞の創設は、同時代の文脈にも即した新人作家の発掘も大きな目的であったが、一方で菊池は「話の屑籠」(一九三五・九)のなかで新人作家への失望も吐露していた。新人作家の「新奇を装つてゐる表現は、新進作家の作品を、いよく仲間的にして、一般の読者階級から離れさせるものではないか」と警鐘を鳴らし、大衆文学だけでなく純文学においても「大衆に読まれる」必要性を強調している。そして菊池は「佐々木、直木、牧の三人の死に依つて、大衆文学の分野には、新人の進出すべき大きな間隙が出来たわけであるが、しかしあまり目ぼしい人もゐないのは、淋しいことである」(「話の屑籠」一九三五・八)と、佐々木味津三・直木三十五・牧逸馬といったベテラン作家が物故した後の大衆文学分野における新人作家不在を嘆き、第一回直木賞を受賞した川口松太郎についても、「直木賞の川口君は、外に人がないので止むを得なかつたのである。川口君は少し有名になり過ぎてゐる」(「話の屑籠」一九三五・九)と、新人不在の状況を訴えている。

そのなかで菊池が評価したのが、第一回芥川賞受賞の石川達三である。石川達三はブラジル移民を描いた「蒼氓」(「星座」一九三五・四)で同賞を受賞するが、菊池はやはり「話の屑籠」(一九三五・九)のなかで石川達三について、「この頃の新進作家の題材が、結局自分自身の生活から得たやうな千篇一律のものであるに反し、一団の無智な移住民を描いて」いる点に言及

しており、従来の私小説的な小説ではなく、社会的題材を扱つた新しさを評価しているのがわかる。

純文学における大衆性の必要を菊池が述べていたことを先に確認したが、ここでの石川達三「蒼氓」への評価を考えると、菊池にとつての小説における大衆性獲得とは、作家自身の狭い内的世界を描くのではなく、社会的題材を描くという点に具体的な方法の一つが見出されると考えられる。

二

さて芥川・直木賞をめぐる菊池の発言を見てみると、純文学のなかにも大衆性を求める発想が認められるのだが、これは先に見た青野季吉「一九三五年の日本文学」が「人々の関心をあつめ」た評論として挙げた横光利一「純粋小説論」および小林秀雄「私小説論」とも接する問題でもある。横光利一は『改造』一九三五年四月号に発表した「純粋小説論」のなかで、「物語を書くことこそ文学だとして来て迷はなかつた創造的な精神が、通俗小説となつて発展し、その反対の日記を書く随筆趣味が、純文学となつ」たと述べ、純文学と通俗小説とを接合した「純粋小説」の概念を提唱する。「純粋小説論」の登場とともに文学界ではさまざまな反応が起こり、〈純粋小説論争〉とも呼ばれる大きな現象となつていくが、本稿で特に注目したいのは「もし文芸復興といふべきことがあるものなら、純文学にして通俗小説、このこと以外に、文芸復興は絶対に有り得ない」とはじ

まる「純粋小説論」冒頭に続く第二段落目の箇所である。

今の文壇の中から、真の純粋小説がもし起り得るとする
なら、それは通俗小説の中から現れるであらうと、このや
うに書いた達識の眼光を持つてゐた人物は、河上徹太郎氏
である。次に通俗小説と純文芸とを何故に分けたのか、別
けたのが間違ひだと云つた大通は、幸田露伴氏である。次
に、もし日本の代表作家を誰か一人あげよと外人から迫ら
れたら、自分は菊池寛をあげると云つた高邁な批評家は、
小林秀雄氏である。今日の行き詰つた純文学に於て以上の
やうな名言が文学に何の影響も与へずに、素通りして来た
のは、どうした理由であらうかと、もう一度考へ直してみ
なければ、純文学は衰滅するより最早やいかなともなし難
いとこのやうに思つた私は、この正月の五日の説売新聞へ、
純文学にして通俗小説の一文を書いた。私の文章は、以上
の人々の尻馬に乗つたままで、何ら独創的な見解があつた
わけではない。しかし、今は、達識の文学者の中では、私
の云つたやうな言葉は定説とさへなつてゐるのであるが、
言葉の意味は、さまざま誤解をまねいたやうであつた。
ここで確認しておきたいのは、「純粋小説」の出現を企図す
る横光が、通俗小説の価値を評価する他の作家たちの言葉を引
きながら「日本の代表作家」として「菊池寛」の名前を挙げて
いる点であり、さらに「純文学にして通俗小説」との主張は、
こうした他の作家の発言のうえに乗つたもので、「独創的な見

解があつたわけではない」と断つてゐる点である。

たとえば〈文芸復興〉が叫ばれはじめた一九三三年二月、『新
潮』に掲載された中村武羅夫「大衆文学と通俗小説」は、「昨
年の後半期から、今年の初めにかけて、純文学の極度の疲弊と
共に、大衆文学が、種々、論議の対象となる機会が、多くなつ
た」と文学界における大衆文学への注目を記しており、『新潮』
一九三四年九月号のXYZ「スポット・ライト」にも長篇小説
を求める同時代のトピックと関連して、「純文学の作家が、長
篇小説を書くといふことは、或る意味に於いて、通俗文芸に一
歩妥協することである」と述べている。大衆文学（通俗小説）
への注目と純文学および大衆文学を接合させる発想はたしかに
同時代の文学言説のなかには散見される。

ここで「純粋小説論」に先行する文学論として確認しておき
たいのが、一九三四年に文芸春秋社から刊行された『新文芸思
想講座』のなかで菊池寛が発表した文学論「連載小説論」であ
る。同評論は「本格的芸術小説が、私小説乃至自叙伝小説の全
盛となつて、ほとんど小説の形式に於ける作家自身の生活記録
になつてしまつた」ことが「日本特異の発達として面白い」と
述べながらも、「小説本来の有する小説的興味、架空的面白さ、
主題的感激などは何処にも充され」ず、「その欠を補ふものと
して大衆文芸が現れてきた」とし（「新聞小説の本質」）、「芸術
性と大衆性の関係は車の両輪の如きもので相扶翼して共に作品
の中核に融け込まなければならない」とも述べてもいる（芸

術性と大衆性)。これらの記述は横光利一の「純粹小説論」の要諦とも重なっている。横光が菊池寛の「連載小説論」を具体的に参照したかどうかはわからないが、横光が作家活動の早い時期から菊池寛の恩恵を受けていた関係を考えれば、横光の「純粹小説論」の源泉の一つに菊池寛の文学観が影響していた可能性は有り得るだろう。

いずれにせよ引用箇所に見る「純粹小説論」の主張は横光が言うように「独創的な見解」ではなく、菊池寛の発言を含め、ある程度同時代文壇で共有されていた内容であったと言える。そして後段で詳しく触れるように、純文学分野における大衆文学（通俗小説）への関心が高まる〈文芸復興期〉と呼ばれるこの時期、菊池寛自体への言及が文学界では見られる。その具体的な様相を見てみたいが、まずは「純粹小説論」の引用箇所にも菊池寛評価を行った人物として登場する批評家・小林秀雄の当時の営為から確認したい。

三

横光利一「純粹小説論」冒頭で菊池寛を評価した批評家として名前を挙げられた小林秀雄は、「純粹小説論」へ応じた評論として最もよく知られる「私小説論」を『経済往来』一九三五年五月号から八月号に連載している。横光の「純粹小説論」末尾には「純粹小説の社会性と云ふやうな問題は他に適当な人が論じられるであらうから、私は今はこれには触れない」とあり、

小説における「社会化した「私」」に言及する小林秀雄「私小説論」は、「純粹小説論」の末尾の言葉を直接受けたものだと考えられる。

小林「私小説論」は横光「純粹小説論」に触れたうえで、「純粹小説の思想は言ふ迄もなくアンドレ・ジイドに発した」と、当時の日本の文学界で話題となっていたフランスの作家アンドレ・ジイドについて詳しく述べていく（横光自身も「純粹小説論」でジイドの名前を挙げている）。そしてジイドは「誇張された告白によつて社会と対決する仕事にも、「私」を度外視して社会を描く仕事にも不満だった」とし、「個人の位置、個性の問題が彼の仕事の土台であつた。言はば個人性と社会性との各々に相対的な量を規定する変換式の如きものの新しい発見が、彼の実験室内の仕事となつたのである」と、個人と社会の関係を小説のなかに組み込むその新しさを評価している。そしてこの小林秀雄の「私小説論」のなかにも菊池寛に関する言及が見られる。

己れの日常生活の芸術化に文学の道を求めるについて、菊池氏にあつては、氏の健康な常識がさういふ仕事の世界の狭隘を感じ、久米氏では特に氏の明るい豊かな感性が、さういふ仕事の生む悲劇や苦痛を厭つた。両氏が文学の純粹性を犠牲にして、通俗文学によつて文学の社会化を試みるに至つたのは、作家意識の上からといふより寧ろまことに自然な成行きであつた。

純文学が「己れの日常生活の芸術化」に向かうなか、菊池寛がその狭隘さを嫌い、「通俗小説によつて文学の社会化」を行つた点がここで述べられている。つまり「文学の社会化」を軸として新しい小説のあり方を論じる小林秀雄は、「文学の社会化」をすでに実践している作家として菊池寛の名前を挙げているのである。もちろん小林秀雄はこの時期の「純粹小説」と呼ぶべき新しい小説の書き手として菊池寛の名前を出しているわけではないが、そのあり方は先に見たように、同じ年の石川達三「蒼氓」の第一回芥川賞受賞に際して、社会的題材を扱ったことへの菊池寛の評価の高さとながら文脈を有している。

新人賞としての芥川・直木賞の第一回受賞者が発表された『文芸春秋』一九三五年九月号に、〈新人論〉の注文に応えた「新人Xへ」を発表するように、同時代の文学界でのトピックに反応していく小林秀雄が、一九三七年一月号の『中央公論』に発表するのが「菊池寛論」である。

小林は菊池寛の初期の戯曲「父帰る」(『新思潮』一九一七・二)を取り上げ、「理詰めな構成、無駄のない人物の動かし方や会話、人間心理の正確な観察、健康な倫理観」が「当時の文壇を動かした」と述べたうえで続けて、「併し今僕はこれを再読し、恐らくこの芝居が動かしたものは文壇人でなく寧ろ一般大衆であつた事をはつきりと感ずるのである。この芝居に動かされた文壇人も、少くとも見てゐる間は一般大衆の心になつてゐた事を感じるのだ」と述べる。

小林秀雄は菊池作品が文学に関わる人々ではなく、「文学的思考も文学的教養も持つてゐないが、実人生だけは承知してゐる、さういふ一般観客」に働きかける力を非常に高く評価しており、この評価は同論のなかでさらに、「氏は文学の社会性といふものの重要さを、頭ではなく身体で、己れの個性の中心で感じた最初の作家だ。氏のこの信念は今日に至るまで一貫してゐるのであつて、作家としてのその才能は或る種の文学の完成には費されず専ら文学の社会化に費されたのである」と、「文学の社会化」という言葉で改めて評価している。

僕は氏の長篇を次ぎ次ぎに読み、何が大衆を惹き附けたかをいろいろ考へたが、結局それは氏の初期の諸作品にあるオリヂナルなものと違つたものではない事を確信した。氏は最初から自分の為にも文学の為にも書かなかつた。批評家の為にも作家の為にも書かなかつた、たゞ一般読者の為に書いて来た作家なのだ。一般読者にとつては、あらゆる文学的意匠は存在しない。ましてや純文学と通俗文学との区別などありはしない。彼等は手ぶらで扱はれた題材の人間の興味の中にづかずか這入つて来るだけだ。

同論の終盤で菊池と読者の関係についてこのように述べる小林はさらに、「純文学の貧困が叫ばれ、純文学者は作品の通俗化を目指してゐる」同時代の文学状況のなかで、「菊池氏の新聞小説には、若し通俗性といふ言葉と大衆性といふ言葉をはつきり区別するなら、通俗性はない、大衆性だけがあるのだ。作

者は読者に面白く読ませようと努力してゐるが、読者を決して軽蔑はしてゐない」と述べている。

「読者の為に書いて来た」姿勢を菊池寛文学の一貫した本質として強調する小林秀雄「菊池寛論」は、「純文学の通俗化」という同時代文学界の大きなトピックの文脈のなかで、「通俗性」ではなく、より高位の〈社会性〉〈大衆性〉を備えた作家として菊池寛を位置付けているのである。

ただ一つここで注意しておきたいのは小林秀雄の「菊池寛論」第二節冒頭には「菊池寛氏に関する評論では正宗白鳥、杉山平助の二氏のものを読んだ」とあり、先行する〈菊池寛論〉の存在がうかがえる。そして、この他にも菊池寛を論じる評論が同時期に書かれている。次節でそれを見てみたい。

四

小林秀雄が「菊池寛論」のなかで触れていた菊池寛論の一つは、一九二八（昭和三）年四月の『中央公論』に発表された正宗白鳥「菊池寛論」だと考えられるが、文芸復興期に先立って発表された正宗白鳥の「菊池寛論」は「菊池寛君を論ずるのは現代を論ずることである」とはじまり、一九二八年の衆議院選挙に社会民衆党から立候補した菊池寛の経歴（結果は落選）や、作家の現実的な生活のためのインフラ整備としての日本文芸家協会設立などにも触れながら、「俗界に関心せずにはゐられない」菊池の特徴と、「過去十年、菊池君が世に出て以来の時世

に適應してゐた。かういふ世間的興味を多く持った文人が勢ひを得るやうな時代」として、菊池と同時代社会との関係を述べている。さらに同論では「引用者注・菊池の誕生が」も少し遅かつたら、菊池君は初めから社会運動でもやるかも知れない」とも述べられており、菊池寛と社会との関係はすでに昭和初年代から指摘されていた。

さて先にも触れたように、文芸復興期には菊池寛へのまとまった言及が文学界でいくつも見られる。正宗白鳥の「菊池寛論」から五年後、杉山平助「菊池寛論」（『中央公論』一九三三・八）は、菊池寛が「すでに芸術家としては存在せず、社会的名士として」扱われるべきとする世評を紹介し、民衆から支持される要素として「凡人主義」や「妥協的」な性格を論じていく。やはりここでも一作家としてではなく、社会的な影響力を持つている人物としてその分析を試みている。

翌一九三四年七月号には青野季吉による「菊池寛論」が発表されている。「菊池寛は日本の文学界にはめづらしい存在である。いなユニークな存在だと云つていいかも知れない。と云ふのは彼のやうな文芸政策家的なかなり広い意味の社会人的な性格といふものは、明治以来この国の文学界には他に類例がないからである」とはじまる同論は、「芸術家」ではなく「文芸政策家」「社会人」として「時代の寵児」たる菊池寛を生み出した状況として、「文学の「大衆化」を挙げる。菊池寛が大衆文学作家および実業家として大きく活躍していた昭和初期の日本

が、資本主義が普及し、「雑誌・新聞が飛躍的に大衆化した時期」とする青野は、「菊池寛の図抜けたポピュラリティーが確立されるには、この社会的・文化的な下準備が必要であ」り、「今日の菊池は社会が押し出し、社会が産み出した」と、社会状況から菊池寛という存在の出現を説明している。

「純粋小説論」が発表される直前、文芸雑誌『行動』一九三五年三月号には中村武羅夫の「菊池寛論」が発表されている。中村もまた「菊池寛は、現在では作家、若しくは文学者としてよりも巨大なる社会的名士として、より強く一般に印象されてゐる」と、菊池の社会的なあり方を強調し、次のように述べる。

一般に文学が、今日の如く社会的に発展を示し、且つ文学者の存在が、他の方面の仕事に従つてゐる人々の存在と比肩して、遜色もなく、特殊なものでもなくなつて来たのは、それにはそれだけの種々な条件があつたことは分つてゐるけれども、一方に菊池寛のやうな人物が、文壇に現はれたことも、「文学」及び「文学者」の存在を、社会的に重からしめた有力な条件の一つとなつてゐると考へてゐるのである。

『文学の社会化』における菊池寛の重要性をこのように説く中村は、「芸術的には、もつと高い価値の仕事をしてゐる誰人を失ふことよりも、菊池寛一人を失ふことの方が、「文学」および「文学者」の社会的存在に取つて大きな打撃であるだらう」

とまで高く評価している。

なお、小林秀雄「菊池寛論」と同じ一九三七年一月、『文芸春秋』に発表された阿部真之助「人間菊池寛」もまた、「常識」的な感覚を持つ菊池寛を高く評価し、「もしも世の中や人間の、展望に於て、彼程の広い視野と理解を持つ多くの政治家が我国にあるのなら、どんなに日本の幸福であるか知れたものではない」と、その社会的な活動に大きな期待をかけている。

さてこのように菊池寛の作品だけでなく、彼自身の活動そのものが『社会性』を帯びた存在として語られていた。さらに一九三五年四月の横光利一「純粋小説論」発表を発端として『純粋小説論争』が起ころが、その文脈のなかでも菊池寛は言及されていた。

『新潮』一九三五年六月号のXYZ「スポット・ライト」では、「横光利一氏の『純粋小説論』といふ一種の通俗小説の主張」は「詮じ詰めれば、純文学作家の生活問題」と述べ、「菊池寛氏などは、疾つくの昔から——純文学の全盛時代から、率直に生活の重要性を説き、文学者と雖も生活を第一に考へるべきであることを主張して来た」と、純粋小説論争に関連してその先駆性が指摘されている。

そして『新潮』一九三五年一〇月号では中村武羅夫「純文学としての私小説」が、純粋小説論争の議論に関わるかたちで小説の「社会性」に触れ、「曾つて日本の小説も、あまりに感傷的になり、小咄的になり、新技巧的になつた時代に、一方に菊

池寛氏などのテーマ小説が現はれて、小説の存在を、社会的に一層ハッキリさせたことがある」と小説を社会に開くにあたつて菊池が重要な役割を果たしたことを論じている。

先に見たように中村武羅夫は「菊池寛論」を発表していたが、同じく「菊池寛論」を発表していた杉山平助も『新潮』一九三五年一月号の「新聞小説雑感」において、「高級な読者にも面白く、同時に大衆にも受けるといふやうな作品」を書いた作家として、先には夏目漱石があり、近頃は菊池寛がある」と述べ、「この情勢の中にあつても、なほ「高級」性と大衆性の結合がのぞまれるのは当然で、その意味に於て菊池寛などが、完全に時代の英雄となり得たのである」と、やはり純粹小説論争が惹起した問題のなかでの菊池寛の象徴性に言及している。

翌一九三六年においても純粹小説論争から連なる議論は続くが、『文学界』一九三六年六月号に掲載された座談会「純粹小説座談会——「下界の眺め」を中心に——」においても菊池の名前が登場する。この座談会は『純粹小説全集』第三巻として有光社より一九三六年二月に出版された武田麟太郎「下界の眺め」(初出は『都新聞』一九三五・五・一〇—一二六)について設定されたものだが、座談会の中では林房雄が「横光の純粹小説といふのは菊池寛が「大島の出来る話」とか「啓古物語」から「火華」、「真珠夫人」に發展した——發展だがね——、その發展と同じ種類のものだ。時代が後だからもつと複雑なだけなんだよ」と、横光の「純粹小説」提唱をかつての菊池寛の

道行きになぞらえており、さらに河上徹太郎も武田麟太郎の「下界の眺め」について「菊池寛の「真珠夫人」的成熟」と表現している。

また『文学界』は一九三六年九月号で座談会「菊池久米を囲む文学論」を掲載している。菊池寛と久米正雄を招いたこの座談会は、彼等が純文学作家から大衆文学作家へと至ったなかでの文壇的な経験などを聞きながら、現代の文学やそれ以外の問題についても意見を聞く趣旨となっているが、このなかで出席者の舟橋聖一が「菊池さんや久米さんがかつてぶつかつたところに、ほかにも又ぶつかりかけてゐるからなんです。純文学に社会性をもたらしたい。それなんです」と発言している。舟橋の発言を見てもわかるように、「純粹小説論争」を経て大きくなつていく「文学の社会化」の文脈のなかで、菊池寛の存在がその重要なモデルの一つになっているのである。

他にも伊集院斉「新聞小説のスタイル」(『新潮』一九三六・八)、丹羽文雄「文芸時評」(『新潮』一九三七・二)、青野季吉「日本の長篇小説の性格」(『新潮』一九三七・七)など、純粹小説論争が産み出していった文壇トピックに関連した議論のなかで菊池寛を評価している言説を挙げればきりがなが、今見てきただけでも、文芸復興期において純文学分野からの大衆文学への注目と接近、そして文学の社会性といった問題が議論されるなかで、菊池寛はそれらをすでに備えた先駆者として確かに文壇言説のなかで評価されていたのである。『文芸春秋』

創刊から編集に関わっていた鈴木氏亨が菊池の伝記『菊池寛伝』を一九三七年三月に実業之日本社から刊行したのは、文壇におけるこの時期の菊池寛への注目とおそらく無縁ではない。

文芸復興期に新人を求める声があったことはすでに本稿第一節でも触れたが、純文学と大衆文学が等価に並ぶかたちで、優れた新人作家と作品を社会に知らせる芥川・直木賞の設置は、ある意味こうした同時代の文学界で交わされた話題を実践した社会的な制度でもあった。そして日本文芸家協会の会長であった菊池寛は一九三六年七月の『文芸家協会会報』に「文芸家協会の使命」を寄稿し、「自分が会長として、文壇の為に為すべき仕事」として「文芸家の社会的地位の向上」を掲げ、国家・社会における文学者の地位向上についてさらなる意欲を示し、立候補した一九三七年三月の東京市会議員選挙では当選し、実際に政治家にもなっている。純文学作家として出発した後に大衆文学作家として成功し、実業家として社会的な活動も行っていた菊池寛は、その存在や作品が文芸復興期のモデルの一つとして言挙げされるだけでなく、そのさなかに設置した芥川・直木賞もまた同時代の文学状況や言説に即した、文学を「社会化」する制度であり、菊池寛がこの時期に担った役割については改めて注目する価値があるだろう。

五

さて、ここまで主に文芸復興期の菊池寛について述べてきた

が、最後に純粋小説論争が拡散させていった文学の大衆化／社会化の問題が、一九三七年以降にどのように展開していったかを菊池寛のその後も見ながら簡単に確認していく。

一九三六年の文壇を総括する『文学界』一九三六年一二月号の座談会「文学は何を為し得たか——本年度文壇の総決算」では、小林秀雄が「大衆といふ問題は起こらないかね、来年は」と問い、「起るね」（島木健作）、「起るね、ことに純文学で」（深田久弥）と応じた後に、さらに島木が「今年からすでに——通俗性とかおもしろさの問題なんかそれだからね」と続けると、林房雄が「大衆といふ問題を一番はじめもつてきたのはプロレタリア文学で、むしろかへしむしかへしてたうとう解決できなかったんだよ。それはやつぱり持ち越して来年はむろん解決できないけどね、もう一度起るね」と反応しており、小林秀雄はじめとした文学者が〈大衆〉の動向にさらなる関心を払っているのが確認できる。この直後である一九三七年一月に小林秀雄が前掲の「菊池寛論」を発表し、その「大衆性」を評価しているのは、こうした一連の文脈に沿っている。

そして果たして一九三七年にはとりわけ〈大衆性〉が文壇においてより大きなトピックとなっていく。⁽⁶⁾『文学界』一九三七年五月号の「大衆文学」時評を担当した木々高太郎は「三月の諸新聞の文芸欄は、偶然の一致であらうと思はれるが、一せいに、文学は如何にして大衆を獲得すべきかと言ふ問題を取り扱ひ出した」と述べ、『読売新聞』『朝日新聞』『報知新聞』とそ

れらに寄稿した作家の名前を挙げて、「これ等の諸論文を通覧すると、第一に、純文学はどうしてもつと大衆的にならなくてはならぬこと、第二に、大衆的と言ふこと、通俗的と言ふこと、との限界は何処にあるかと言ふこと、この二つの大きな問題について論じてゐるのだ」とあり、〈純粹小説論争〉から続く純文学の大衆化の問題と、小林が「菊池寛論」で強調するような〈通俗性〉ではない〈大衆性〉が求められている文脈が確認できる。『新潮』一九三七年七月号では座談会「文学の大衆化の問題」が企画されるほか、青野季吉「文学の大衆化論」（『日本評論』一九三七・四六）、中條百合子「文学の大衆化論について」（『新潮』一九三七・五）など、これらは一例に過ぎないが、文学と大衆の問題を扱う評論が目につく。

そのなかでも「幸か不幸かはとも角、民衆といふ言葉が、再び時代語として登場して来た」と書き起こす窪川鶴次郎「文芸思潮の一課題——創作方法における大衆の問題——」（『文芸』一九三七・一一）は、これら同時代の大衆・民衆に関わる文壇での論説も触れながら、文学と大衆の関係の歴史を素描している。窪川は同論において読者意識が高まった契機として純粹小説論争や小林秀雄「菊池寛論」を挙げ、「昨年の後半期に入つて、日本的なものについての論議が擡頭するや、読者への関心は、一転して民族、国民、民衆へのそれとなつた」と、読者への関心がナショナリズムの高揚とともに「民族、国民、民衆」といったもののへとスライドしていった様相を述べている。〈文学の大

衆化〉をめぐる議論は、同時代の注目を集めるテーマであり、社会的な状況とも絡みつつ、また違う局面へと移っていくのである。

ここで勃発するのが一九三七年七月の盧溝橋事件であり、日本は中国と交戦状態となる。そして翌一九三八年には菊池寛はペン部隊を組織し、戦地へ赴くことになる。ペン部隊には純文学作家だけでなく、大衆文学作家も動員されており、彼等は国民の誰もが関心を持たずにはいられない社会的出来事である戦争という素材に出会うため、菊池寛の指揮のもと中国大陸に渡る。本稿で考察してきた菊池寛を中心とした文芸復興期の一連の文壇言説はここで一つの象徴的な帰結を迎えるのである。

本稿冒頭で登場した太宰治とも縁が深い石川淳は純粹小説論争のさなか、「佳人」（『作品』一九三五・五）で作家として出発するが、同時代の純粹小説論争には冷淡な姿勢を示し、反軍的として発禁処分になる「マルスの歌」（『文学界』一九三八・一）では大衆への距離と嫌悪をあらわしていた。石川淳の大衆や戦争に対する否定的な態度は、本稿で述べてきた、大衆と戦争に接近する当時の文壇動向をちようど反転したかたちとなっており興味深い。

こうした石川淳の例を考えると太宰治はもう少し複雑なようである。文芸復興期のコンテクストから「道化の華」（一九三五・五）をはじめとした太宰治の初期作品を捉え直す平浩一は、太宰作品に純文学と大衆文学という問いを見出してお

り、大衆文学の動向に無関心ではない太宰治の姿を明らかにしている。⁽¹⁰⁾そして太宰は「もの思ふ葦」の「ダス・ゲマイネに就いて」(『日本浪漫派』一九三五・一二)において、「ダス・ゲマイネ(卑俗)」は「菊池寛」だとし、「人ありて、菊池寛氏のダス・ゲマイネのかなしさを真正面から見つめ、論ずる者なきを私はかなしく思つてゐる」と記すのをはじめ、「虚構の春」(『文学界』一九三六・七)、「創生記」(『新潮』一九三六・一〇)、「二十世紀旗手」(『改造』一九三七・一)、「HUMAN LOST」(『新潮』一九三七・四)、また戦時下の「誰も知らぬ」(『若草』一九四〇・四)などの作品のなかでも菊池の名前を登場させている。それらの持つ意味については改めて検討が必要であるが、少なくとも文学と社会の関係が論じられるこの昭和一〇年前後の文学界において菊池寛の存在は想像以上に大きく、菊池をめぐる言説は発話主体と文学状況との関わりを示す符牒ともなっているのである。

注

(1) 昭和一〇年前後の文壇における新人をめぐる言説については松本和也『昭和一〇年代の文学場を考える——新人・太宰治・戦争文学』(二〇一五・三、立教大学出版会)の第4章「昭和一〇年前後の新人(言説)——雑誌『作品』と石川淳」などの研究がある。なお、本稿の軸となっている〈文学の社会化〉についても、同書第1章「昭和一〇年代における題材と芥川賞——石川達三『蒼氓』

や第6章「昭和一〇年前後の私小説言説——文学(者)の社会性」などの研究があり、同書から多くの示唆を受けている。

(2) 横光「純粋小説論」に何らかのかたちで言及した同時代の評論は数多いが、横光の盟友でもある川端康成は「純粋小説論」発表の二ヶ月後の「文芸時評」(『文芸春秋』一九三五・六)で、横光の「純粋小説論」に言及した二〇近い評論を列挙し、その反応の大きさを伝えている。

(3) 菊池寛「連載小説論」は前半部分が文芸春秋社発行の『新文芸思想講座』第四卷(一九三五・一)に掲載され、後半部分が同書第一〇卷(一九三四・七)に掲載された。

(4) なお、正宗白鳥の「菊池寛論」は、『現代文芸評論』(一九二九・七、改造社)に収録され、さらにその後の一九三二年七月、中央公論社から出版された『文壇人物評論』にも再録されている。

(5) 『純粋小説全集』は、『純粋小説論争』をうけて有光社が企画したシリーズで以下の本が出版された。『第一巻』横光利一『盛装』(一九三七・二)／『第二巻』林房雄『衣裳花嫁』(一九三六・一〇)／『第三巻』武田麟太郎『下界の眺め』(一九三六・二)／『第四巻』岸田国士『鞭を鳴らす女』(一九三六・八)／『第五巻』尾崎士郎『情熱の伝説』(一九三六・四)／『第六巻』林芙美子『稲妻』(一九三六・二)／『第七巻』芹沢光治良『春箋』(一九三六・七)／『第八巻』室生犀星『弄獅子』(一九三六・六)／『第九巻』川端康成『化粧と口笛』・舟橋聖一『白い蛇赤い蛇』(一九三七・三)／『第一〇巻』宇野千代『罌粟はなぜ紅い』(一九三七・一)／(第

「一巻」片岡鉄兵『流れある景色』（一九三六・五）／「第二巻」岡田三郎『春の行列』（一九三六・九）／「第三巻」深田久弥『強者聯盟・津軽の野づら』（一九三六・一一）。

（6）同時期の文学と民衆の問題を論じた論考として中谷いずみ『その「民衆」とは誰なのか ジェンダー・階級・アイデンティティ』（二〇一三・七、青弓社）第1部「一九三八年、拡張する文学——周縁の発見と包摂」の諸論がある。

（7）ペン部隊は、菊池寛をはじめ、吉川英治・岸田国士・滝井孝作・深田久弥・北村小松・杉山平助・林芙美子・久米正雄・白井喬二・浅野晃・小島政二郎・佐藤惣之助・尾崎士郎・浜本浩・佐藤春夫・川口松太郎・丹羽文雄・吉屋信子・片岡鉄兵・中谷孝雄・富沢有為男の二二名。

（8）石川淳は「私小説の読者として」（『文芸通信』一九三五・七）のなかで、横光利一「純粹小説論」や小林秀雄「私小説論」における議論に触れながら、「文学の他の問題として取り上げらるべき」「既に本来の私小説の問題を踏み越えてしまふ」と述べている。

（9）〈純粹小説論争〉や〈文学の大衆化〉に対する石川淳の距離については、拙稿「石川淳と小松清——昭和初期におけるジイド受容をめぐる」（『愛知県立大学説林』二〇二三・三）で触れたことがある。

（10）平浩一『「文芸復興」の系譜学——志賀直哉から太宰治へ』（二〇一五・三、笠間書院）第四部「文芸復興」からみる太宰治」所収の諸論を参照。また、同書第二部「純文学」外の要素と「文

芸復興」——ジャーナリズム・大衆文学を中心に」では〈文芸復興〉を大衆文学側から考察しており、貴重な研究となっている。

（11）太宰治と菊池寛の関係についてまとめた研究は少ないが、相馬正一「太宰治と菊池寛——テーマ小説・歴史小説の受容——」（『解釈と鑑賞』一九九八・六）は若い時期の太宰治が菊池寛から受けた影響を論じている。

* 菊池寛の引用文は高松市菊池寛記念館版『菊池寛全集』（一九九三・九九）に拠り、太宰治の引用文は筑摩書房版『太宰治全集』（一九九八・九九）年、横光利一の引用文は河出書房新社版『定本横光利一全集』（一九八一・九九）、小林秀雄の引用文は新潮社版『小林秀雄全集』（二〇〇一・一〇）にそれぞれ拠った。引用箇所すべての旧漢字は新漢字に改め、ルビは省略した。

（わかまつ・しんや／愛知県立大学准教授）